ケガの功名 ～思いを言葉に～

痛い話である。

右手親指の第一関節辺りをノコギリで切ったのだ。何といってもギザギザの歯で切った訳であるから、ズタズタという言葉が似合う有様であった。

直後、私は慌てて傷口を流水で洗い、しばらく物思いに耽った。何を一心に考え込んだのかというと、どうしたら病院に行かなくて済むか、である。元来、病院は好かない。

しかし、無理であった。己の体ながら、切り刻まれた肉片や皮膚が、どの部分だか見当がつかない。何より、血が一向に止まらなかった。私は左手に何枚も重ねたティッシュを持って傷口を包み、力一杯に握り締めながら病院へと向かった。

結果、四針縫うこととなり、二週間程ではあったが利き手が満足に使えなくなった。

痛い話は以上である。

怪我をしてからは、日常であった生活が限定されたものとなった。親指とはよく言ったもので、つかむ、つまむ、といった動作が出来ない。佛さまに御火を上げるのも、御水を供えるのも、御香を焚くことすら一苦労であった。水に触れることもままならず、手洗いや入浴、歯磨きが十分に出来ない。着替えも出来ない。掃除も出来ない。家事も出来ない…挙げ出したら切りがないほど出来ないことが増えた。利き手ではない左手ではぎこちなく、我が手ながらどうも芳しくないのである。

傷が癒えるまで社会が停まってくれる訳ではないから、毎日の務めはこなさなければならない。当然、私が出来ないことは全て家内にお願いすることになる。私は出来ないことが増えた代わりに、「ありがとう」と素朴な気持ちで口にすることが増えた。

すると、どうだろう。感謝の言葉を家内に面と向かって伝えるようになってから、自然と互いに笑顔が増えてきたのである。

これまで、食事の支度から洗濯、家事全般を率先して行ってくれる家内に、感謝の心を持ち合わせていなかった訳ではない。気持ちさえあれば、その思いを口にしなくてもよいと高を括っていた訳でもないが、言葉の発達が著しい二歳半の倅まで私達の真似をしてか「ありがとう」と笑顔で何度も口にし始めた時、以前にはなかった光が家の中に差し始めた。家庭内が明るくなってきたのである。

振り返れば、怪我をした場所はお稲荷様の神域にある木の枝を払おうとした矢先であった。はじめは罰でも当たったかと思っていたが、傷も快方に向かう今となっては、また違った思いを抱く。当たり前だと思っていた普段の生活が如何に尊く、有り難いものであるかを深く思い知った。そして何より、明るい言葉を口にすることの大切さを改めて学んだ。

言葉が生活を作る、これは生命を司るお稲荷様から教えられたことだと思っている。

ふと思う。あの時、怪我をしなかったら…私は、今の心境に達していただろうか。家庭は、今のように明るかっただろうか。家族は、今のような笑顔を見せてくれていただろうか。

しかしながら、もう痛い思いは御免である。

やっさん